

言葉による教育の原理および方法に関する研究

—『入木抄』を中心とした書論の記号学的分析を通じて—
(3)「能」を示す評価の言葉③—小野道風「智証大師諡号勅書」—

古 市 将 樹

A research about educational principle and technique, which based words
—A case study : Analysis of “*Jubokushou*” and other “*Shoron’s* (Calligraphy
theorys) by the knowlege, experience, philosophy of the semiology—
(3)The words which indicate evaluation criteria about “*Nou*”(Can) ③
— Letters, known as *Chisyoudaisi-sigouchokusho* by Ono no Michikaze —

Masaki FURUICHI

2018 年 11 月 9 日受理

抄 録

本研究は、専門親王『入木抄』の言葉だけによる教育の原理と方法を分析するにあたり、そこに登場する能書に関して、「能」がどのような基準で評価されているのかを明らかにするために、『入木抄』における伝承的な語りと、現在の言葉のちがいを確認することを目的としている。本稿は、これまで分析してきた空海の「風信帖」「灌頂暦名」につづき、小野道風の「智証大師諡号勅書」について、それを評価するテキストの分析をおこなうことで、なぜそれが優れているとされるのか、高い評価の基準について考察している。それに当たり、『入木抄』、先行研究における総合的な解説、様々な資料における評価の言葉を具体的な分析対象とした。

キーワード：書論、『入木抄』、小野道風、「智証大師諡号勅書」、評価の言葉

承前

本稿は、本研究でこれまでおこなってきた、空海の「風信帖」(『常葉大学教育学部紀要 第 38 号』2017 年)と「灌頂歴名」(『常葉初等教育研究 第 3 号』2018 年)の分析に続くものであり、小野道風「智証大師諡号勅書」(東京国立博物館蔵：国宝)を分析対象としている。空海の場合、三筆のひとりであり、能書としても知られるが、それ以上に、真言宗の開祖、宗教者として、彼の人格的な面の高い評価が先行し、書の評価の言葉にもその影響が大きかった。それでは、空海とは異なり、能書としての

評価が第一義である道風の書の場合はどうであろうか。今回は、その評価の言葉がどのように構成されているのかを分析する。

1. 『入木抄』における小野道風に関する記述

『入木抄』では、能筆の書に学ぶことが繰り返し説かれており、道風もそのひとりである。それでは同書において、彼はどのように語られているのかを確認する。道風（野跡）の名前が出てくるのは次のふたつの条である⁽¹⁾。

まず、「入木抄の一芸、本朝は異朝に超たる事」の条には、

弘法大師入唐の時、王宮壁字、王羲之筆一間破損。依_レ無_二其仁_一、闕_レ之。大師奉_レ勅書_レ之。普代より唐朝に至まで、久絶たる道を被_レ興了。又、道風が申文にも、万里の波濤を隔てゝ名を唐国に駆と書たり。文時・匡衡等が文にも、此詞を書載歟。測知、此道本朝に拔群の人多しと云事を。〔中略〕其後聖廟拔群也。聖廟以後、野道風相統す。此兩賢は筆跡相似たり。佐理・行成は、道風が跡を写来。野跡・佐跡・権跡、此三賢を末代の今に至まで、此道の規模として、好事面々、彼道風を摸也。仍本朝の風は、不_二相替_一者也⁽²⁾。

と記されている。ここでは、尊円親王の考える、中国の書道に対する日本のその優位性や独自の進化が述べられている。

次に、「本朝一跡なれども、時代に付て筆跡分明事」の条には、

弘法大師前後の程の手跡、大略一樣也。道風以後、又各野跡の風也。行成卿は道風が跡を摸といへども、聊我様を書出せり。其後一条院の御代よりこのかた、白河・鳥羽の時代まで、能書も非能書も、皆行成卿が風跡也⁽³⁾。

と記されている。ここでは、日本の書道の時代ごとの進化の特徴が述べられている。

これらの条は、日本の書の歴史を解説する内容になっている。そこでは、能書にまつわる言い伝えや逸話、新たな書体・書風を作り出し、それが継承されたり、後の書家に影響を与えたりしたことを織り交ぜながら、その時代を築いた中心的な能書が語られている。そして道風はそのひとりに位置づけられている。

また、この他に道風について語られている条としては、彼個人としてではなく、道風を含む「三賢」について述べられている条が、さらにふたつある。

まず、「手本用捨事」の条において、「三賢等の筆なればとて、初心の人、先達に不_レ談して、此本面白、彼字有_レ興とて習学し候へば、必手跡損候也」⁽⁴⁾と語られ、たとえそれが三賢の書であっても、初学者が自分の面白みや興味のみで手本を選ぶことを戒めている。次に、「当世多消息を手本とす、不_レ可_レ然事」の条においては、将来能書になれるか定かでないから、手近な消息を上手く書けるようになることをめざすような、目標を低く設定することを戒め、

太宗の詞に、法を上にとる故に為_レ中、法を中にとる故に下たる事を得、と申て候も此心也。手本とて往来など書候は、只の書状などには不_レ似。いささか等をかいつくろひてこそ書候へども、それも消息にて候間、いかにも清書の物には、筆仕も違候也。さ候へば、上古の手本三賢等の筆は、みな文集詩等にて候。消息

を手本とて書たるは、いたく見えず候也⁽⁵⁾。

と、先達たる三賢も手本として文集詩（白氏文章）を書いていたと述べている。

以上、道風に言及されている部分では、彼の書が具体的にどのように優れているかは語られていない。語られているのは、「道風が能書として優れている」ということである。それでは、これは『入木抄』においてのことに限られるのだろうか。また、「道風が能書として優れている」にはどのような意味があるのであろうか。

2. 「智証大師諡号勅書」の現在の解説

現在、道風の真筆とみなされている数少ない書の一つが「智証大師諡号勅書」である。彼の書について論じている先行研究や解説書では、必ずこの勅書に触れているといっても過言ではない。そのような中で、比較的簡潔な、とともに詳細な解説として、総合的に論じている、堀江知彦「智証大師諡号勅書」がある。そこで「勅書」がどのように解説されていたのか、特に、解説の全体構造を確認するため、やや長くなるが引用する。

延暦寺五世の座主円珍が示寂したのは寛平三年（八九一）で、当時少僧都法眼和尚位であった。それから三十六年の後、延長五年（九二七）十二月二十七日に、円珍生前の功を恩召された朝廷では、法印大和尚位に昇任の上、智証大師の諡号を賜われることになった。その宣下の勅書が即ちこれである。天地九寸五分、藍紙三枚を継いで全長五尺一寸一分。紙面には幅一寸二分で室野三十七行を打ち、墨付三十二行、方二寸九分の天皇御璽十三顆を捺している。この御璽は裏面の継目にも二顆捺してあったのを、今では剥ぎ取って勅書の奥に貼って保存している。

この勅書の執筆者は小野道風と推定される。というのは、当時こうした詔勅の宣下は中務省の掌るところで、儒学に造詣がふかく、文章にも書にも秀でた内記の手によって起草執筆されていた。そして道風はこの年少内記の任に在ったからである。時に三十四歳。

この延長五年という年を中心にして、能書家としての道風がどんな活躍振りを示していたか。その前年の五月、興福寺の寛建が入宋に際して、道眞、長谷雄、広相、良香の詩集とともに、道風の行草書各一卷を携えて海を渡った。かの土にその優秀さを誇らんがためである。前々年の八月には、醍醐天皇が母后藤原胤子の法要を修せしめ給うた際、その願文の執筆を命ぜられている。そしてこの延長五年の二月には、醍醐天皇の皇子克明親王が桃園の官で藤原清貫の六十の賀を祝わせられ、そのための薬師経を小野忠則とともに書写している。また翌年の六月には、仰せをうけて清涼殿南廂の壁に、漢朝以来の賢君明臣の徳行を揮毫した。元来道風は能書の故をもって少内記に任ぜられた人であって、しかもかようにその方面での実績を数々あげているのであるから、この詔書の執筆者にかれを推定するのは最も自然に違いない。

ところでわれわれは幸なことに、この推定の誤らぬことを立証する一つの遺品を持っている。それはかれが清涼殿の南廂に揮毫した延長六年の十二月に大江朝

綱の詩を御屏風に書いたという「日本紀略」の記事とともに遺された、その際の下書きと考えられる筆跡である。今は皇室の御所有となっている「屏風土代」が即ちそれである。これにも勅書同様道風の署名はない。しかし保延六年（一一四〇）に、藤原定信が、「日本紀略」に見える史実と思い合せてそれが朝綱の詩であって、本文に推敲の跡を止めているところから、御屏風執筆の折の下書きと推定し、さすれば道風三十五歳の時の筆跡と鑑定して、その旨を「屏風土代」の巻末に書き加えて置いてくれたのである。定信は行成からは五世に当る能書家で、時の書道界に重きを成した世尊寺家の当主である。定信のこの鑑識は信じていゝものであり、従ってこの「屏風土代」との比較において、はじめてこの勅書も、かの「玉泉帖」とともに道風の眞跡として確認されるのである。

勅書の書風は、勅書たるにふさわしく、まことに堂々四隣を圧する雄大な気魄と莊重な重量感とに溢れたものである。その上大らかな気品の高さと息の長さと水々しい弾力性とを備えている。これらは道風の独壇場であり、また大きな魅力ともなっている。そしていかにも豊かで深い墨色の美しさが、かれのこの特色を十分に生かしている点も見逃しがたい。「屏風土代」にはどことなく中国風の感覚が顔を出しているが、この勅書においては、強い筆力をあくまで豊満な筆触に包んで、見事な和様を完成している。

道風の生活した十世紀の前半は、いろいろの面に日本的な意識の昂揚した時代であった。しかしこの氣運が突然生れよう筈もなく、実は九世紀の後年においてすでに準備されていたことは、道風の生れた寛平六年（八九四）に遣唐使の停止が決定されたことや、古今集の作家達の眞の活躍期が、この九世紀後年に在ったという事実とがこれを裏書きしている。そしてこの五十年にわたる準備期間を経て、はじめてすべてのものが「日本的なもの」の創造という波に乗って、まっしぐらに進んで行ったのである。延喜五年（九〇五）の延喜式の撰上も承平年間（九三一―九三七）と推定される倭名類聚鈔の編纂も、天曆五年（九五―一）の醍醐寺五重塔の板絵も、そして今こゝに取り上げている道風の書も、一としてその具体的な現れでないものはない。

道風よりはやゝ先輩たる貫之も能書として聞えた人だったらしい。源氏物語「絵合」の巻に、弘徽殿方の出した宇津保物語「俊蔭」の巻の詞書が道風であったのに対して、梅壺方の出した竹取物語の詞書が貫之であったことがこれを物語っている。だから歌人としての貫之も和様書道の創始にたしかに一役買った人であったと見ていゝのであるが、源氏の作者は、道風の手を「今めかしうをかしげに目も輝くまで見ゆ」と許して弘徽殿方に勝ちを与えている。貫之は道風に先立つわずか二十年足らずで歿しているし、二人の書風にそれほど新旧の差があろうとも考えられないが、事實は道風の書風に特に「今めかしさ」が認められ、それが勝敗を分つ大切な素因の一つとなっている。この事は道風の書を考える上に見逃してはならない点であって、時代の感覚をとらえるのに道風という人は、やはり芸術家的な鋭敏さを持っていたと云えるのだろう⁽⁶⁾。

それでは、この解説がどのような構造をもっているのか、段落ごとに内容をみていく。すると、以下のようにまとめられるであろう。

第一段落：諡号を送られた円珍と勅書の形態について

第二段落：道風の書と考えられる根拠について①役職

第三段落：道風の書と考えられる根拠について②道風の能書ぶりについて

第四段落：道風の書と考えられる根拠について③「屏風土代」との比較について

第五段落：勅書の書としての評価

第六段落：日本の書道史上の道風①和洋の完成期

第七段落：日本の書道史上の道風②（紀）貫之との比較

この段落構成は、一見、読者が「智証大師諡号勅書」について理解するための、基礎的な情報が過不足なくコンパクトにまとめられているようにみえる。だが、情報はそれに終らない。評価を記した第五段落はその他の段落とかなり異なった内容になっている。

第五段落以外を、その内容に注目して、改めてまとめてみると、次のようにできるであろう。

第一段落：権威ある諡号と、その宣下である、やはり権威ある勅書

第二段落：「儒学に造詣がふかく、文章にも書にも秀でた内記」である道風

第三段落：道風の能書としての実績

第四段落：皇室所有の「屏風土代」、史料の記述、能書である（藤原）定信の鑑定

第六段落：「日本的なもの」の創造を担った道風

第七段落：平安時代当時から評価の高かった道風

つまり、これらの段落は、第五段落における評価の間接的な根拠を形成しているのであり、デノタシオン（*dénotation*）である第五段落に対して、コノタシオン（*conotation*）の役割をもつと考えられる⁽⁷⁾。デノタシオンの読み方を指示するのがコノタシオンである。前者には様々な読み方・解釈の仕方がある中で、後者は読み解くためのコードを提示する。

このことは段落レベルにとどまらない。第五段落の中においても、「勅書たるにふさわしく」という表記があるために、次にくる「堂々」の意味のとりかた、解釈の仕方が決まってくる。一般的に「堂々」には、「いかめしく立派」「立派で威厳がある」「こそこそしていない」「隠し立てしていない」などの意味がある。もちろんこれらを截然と区別することはむずかしいが、「勅書」が天皇の命令・意志が記されたものであることからすれば、この場合、後二者よりは前二者の意味が強く付与されるのではないだろうか。その点で、ここにもデノタシオン（堂々）とコノタシオン（勅書たるにふさわしく）の関係がみてとれる。では、評価を示すためのこのような方法は特別なのだろうか。

3. 「智証大師諡号勅書」に関する現在の評価

先の堀江の解説以外では、「智証大師諡号勅書」はどのように説明・評価されてい

るのか。ここで、研究書、書道雑誌、図録など、様々な資料に目を転じ、特に、直接的にその特徴を記している言葉がみられる部分を中心に、それらを発行年順に列挙してみよう。なお、現在書の評価は、字形、結体、点画など、字を構成する各部分、さらには料紙との兼ね合いまで含めて評価されることが多く、最終的にはそれらの各論的な分析を要するが、これは今後の課題とする。

ア) 藤原茂（鶴来）『和漢書道史』、1927（昭和2）年。

智證大師名は円珍、俗姓は和気氏、延暦寺五世の座主にして、寛平七年四月享年七十八で遷化せられた。後三十年を経たる延長五年十二月、勅して法師大和尚を賜はり、智證大師の諡号を贈られた。其の宣下勅書が即ち是で、文は藤原博文の撰である。之を道風と断定したのは、書風が屏風土代と揮毫の差がない為で、屏風書より一年前卅四歳の筆に当たる。料紙は藍紙、書風豊潤にして妍美、墨色淋漓今寄きものゝ如く首尾に天皇御璽が九個ある⁽⁸⁾。

イ) 川谷賢『書道史大観』、1928（昭和3）年。

本書は藍紙を用ひられて墨色淋漓、今書きたるものゝ如く、天皇御璽の印色亦頗る鮮明なり、蠅頭の楷を以つて書かれたる奉宣諸官の官位の文字の如き朝臣を措きて誰かはと覺ゆ。朝臣の善書は天徳三年八月十六日の闕詩行事略記にも『木工頭小野道風者、能書之絶妙也。羲之再生仲將獨歩、施此屏風、書彼門額、處々莫不靈、家々莫不珍者、仍爲一朝之面目、仍爲一朝之面目、爲萬古之遺華』と当時の人さへかくもてはやしけるなり。此の勅書幸に千載の後に伝はりて親しく延喜延長時代の典故の式を見る事を得るは豈たゞ墨池の至幸たるのみならんや⁽⁹⁾。

ウ) 尾上柴舟・諸橋沅水『書道講座 日本書道史』、1932年（昭和7）年。

智證大師は、延暦寺第五世の座主で、名は円珍、俗姓は和気氏、寛平七年、享年七十八にて遍化し、後三十年を経て、延長五年十二月、勅して法印和尚の位を賜はり、智證大師と諡号された。勅書の文は、式部大輔藤原博文の撰で、道風が三十四歳の時の書である。書体行草を交へ、豊潤妍美にして黒色淋漓たるものである。天皇御璽の印色亦鮮明である⁽¹⁰⁾。

エ) 伊東青州「藤原時代書道史」、1942（昭和17）年。

智證大師とは円珍のことである。延長五年十二月勅して法師大和尚位を賜はり、智證大師と諡号せられた。勅書は道風三十四才の時の書にして、行草を交へ、豊潤優麗にして頗る温雅である⁽¹¹⁾。

オ) 春名好重「古筆辞典」、1942（昭和17）年。

この勅書は円珍に法印大和尚の位を賜り、智證大師の諡号を授けらるべき由の宣下である。日付は延長五年十二月二十七日とあり、筆者小野道風の三十四歳の時にして、彼の屏風土代を書いた年の前年である。料紙は藍紙にして、墨痕淋漓、「天皇御璽」の印色も亦鮮明である。その事は形態端正にして些かの偏僻もなく、結體完好にして点画豊潤であり、沈着なる筆致にして、優麗典雅の趣致に富む。その書風は道風筆たることを藤原定信が證してゐる屏風土代と全く同一にして、

形態も、点画も、筆致も毫もかはるところがない⁽¹²⁾。

カ) 春名好重編著『日本書道史論』、1943(昭和18)年。

智證大師諡号勅書は、延長五年十二月二十七日、円珍に法印大和尚の位を賜ひ、智證大師の諡号を授けられた時の宣下の勅書である。当時第一の能書にして、勅書を書するに奉仕すべき人は道風である。且つ延長六年に道風が書いた屏風土代と筆致、書風を等しくしてをり、この勅書を道風筆と断定することができる。延長五年は道風三十四歳の年であり、その書は、形態は整齐にして温雅であり、点画は豊潤にして優麗であり、勁健峻拔の風は些かもなく、円味と柔かみとを有してをり、やさしく、おだやかな書である⁽¹³⁾。

キ) 田中塊堂「改題」、1954(昭和29)年。

寛平三年(891)に少僧都法眼和尚位で示寂した延暦寺座主第五世圓珍が、三十六年後の延長五年(927)に法印大和尚位に昇せられ、智證大師の諡号を授けられた時の勅書である。藍の檀紙に豊満な墨痕が、こころよい調和を見せ、その上を「天皇御璽」が厳肅におされていて、一種の崇高さを感じしめる。文は式部大輔藤原博文であることが、勅書世紀に明記されてある。勅書の体裁は、唐制を模倣したもので、二通作成して、御画日及敦實以下の自署ある原本は、中務省に留めおいて、寺へ賜う一通はその写しであるから、八人の署名も皆同一手に書かれている。

これは確かに道風の書と考えられる。かかる勅書を書く場合は、とくに一代の能書に命ぜられるものであるから、当時道風を措いては他にないし、道風はこの年には少内記の任にあったことがこれを道風の書とする推測を裏づける。彼が天徳の奏状中にも、賢聖障子、大嘗會の屏風など幾度も書いたことを記し、臨時の奉勅は数うるに勝うべからずといっているし、その書も道風の真蹟である屏風土代と同一筆と思われるから、彼の書とするに誰も疑うものはないようである。延長五年は道風三十四歳のときであり、太い弾力性のある墨線は壮年の気力にあふれ、盛り上つてくるように感ぜられる。藍色の料紙の美しさといま一つまことに勅書にふさわしい気品にとみ、道風の力量をいかにあらわしたものであるべきであろう⁽¹⁴⁾。

ク) 平山観月『新日本書道史』、1965(昭和40)年。

寛平三年(八九一)、少僧都法眼和尚位で示寂した延暦寺第五世座主円珍が三十六年後の延長五年(九二七)法印大和尚位を賜わり智証大師と諡号せられた時の勅書である。勅書の文は式部大輔藤原博文の撰になる。この勅書を賜わった延長五年は道風三十四歳の時で、太い弾力性のある墨線は壮年の気概が溢れ、藍の檀紙に行草交えて書かれた書体は、豊潤美、墨色淋漓たるものがある。最初の天皇御璽の印色が鮮明で勅書にふさわしく気品に富んでいる。

このような勅書を書く場合は、特に一代の能書に命ぜられるもので、当時道風を措いての能書家は他になく、書風も道風の真跡、屏風土代と同一の筆幅で、道風の書として確実なものとされている⁽¹⁵⁾。

ケ) 町春草『平安書道芸術の人びと』、1971(昭和46)年。

この勅書を書いたのは、小野道風と信じられています。そのころこうした詔勅の宣下は、中務省のつかさどるところで、儒学に造詣ふかく、文章や書にもすぐれた内記の手によって、起草され執筆されるのが常でした。そして、道風はこの年には少内記に任中で三十六歳。そして、道風は能書であったために、少内記に任ぜられた人です。

勅書の書風は、屏風土代の中国的感覚と違って、全く豊かな強い筆力をそのまま、みごとに和様化し、成功しています。長い間の唐様様式、つまり日本的なものへの創造の初期時代ですから、芸術家として鋭敏な道風によって、和様書道の推進に大切な役目を果たしているといえましょう。それにふさわしく雄大な気魄、大らかな気品の高さ、そして重量感、弾力性など、道風ならではの魅力が溢れております⁽¹⁶⁾。

コ) 『別冊太陽愛蔵版「書」』平凡社、1979(昭和54)年。

きわめてきちんと整った楷書体は、書く者の自由な筆遣いを抑制する要素をもっていた。が、それをくずすようになり、すなわち行書や草書の美しさが追求されるようになって、漢字書きの芸術性の幅が一気に増したといえるだろう。さらに唐様を脱した時、日本の書に道はひらけた。〔中略〕道風の格調高い「諡号勅書」(公文書であるため緊張感がある)・・・⁽¹⁷⁾。

サ) 春名好重編著『古筆大辞典』、1979(昭和54)年。

『帝王編年記』にこの勅書は小野道風(八九四～九六六)が書いたと見えている。字形は端正にして結体は完好であり、点画は豊潤にして筆力を内に潜め、外に表さない。おちついて入念に書いている。全文濃墨で、墨色の濃淡の変化は無い。この勅書と道風の真跡と認められている『屏風土代』や『玉泉帖』などとは同筆である。それ故この勅書の筆者は道風と認められる。延長五年に道風は三十四歳で、官は少内記であった。内記は詔勅の起草や清書をする官である。それ故、道風が清書したのである。「天」の第四画、「座」の第三画、「少」の第四画、「和」の第二画、「証」の第二画、「仰」の第六画、「印」の第六画、「行」の第六画などは特別長く書いている。しかし「則」の第九画、「師」の第十画などは長く書いていない。行の末がつまると、文字を小さく書いている。藤原教長(一一〇九～)の『才葉抄』に「文字不具なる事あるべからず、篇(偏)小にして作り(旁)大に、外囲大にして内をば小(さ)く書事也、あしき也、道風・佐理・行成の手跡、不具なる字画なきなり、」「末練の間は文字を高く可書也、究意になる時は少し平に成事也、去(れ)ば道風などの書(き)たる物は、わかき手のときは文字高きなり、老後に至(り)てはひらみて見ゆる也、」と見えている。道風の字形は整齐である⁽¹⁸⁾。

シ) 文化庁他監修『日本の美術 第180号 平安時代の書』至文堂、1981(昭和56)年。

豊かな量感と気魄に満ちた書風は、小野道風独自のもの。延長五年(九二七)

十一月十一日、延暦寺第十世の座主増命が示寂したため、朝廷は「静観」の諡号（おくり名）を授け、その師円珍（八一四～八九一）には法印大和尚位に昇格の上、「智証大師」の諡号が増られた。円珍の没後三十六年目で、道風三十四歳の筆と知られる⁽¹⁹⁾。

ス）文化庁監修『国宝 11 書跡Ⅲ』、1984（昭和 59）年。

天台座主少僧都法眼和尚位円珍は、寛平三年（八九一）十月二十九日、七十八歳で示寂したが、それより三十六年後の延長五年（九二七）十二月二十七日に、醍醐天皇は円珍に法印大和尚位を贈り、智澄大師の諡号を賜った。

この文書はその時の勅書の原本で、もと園城寺に伝来し、北白川宮家に伝わったものである。体裁は縹色の料紙三枚を継いで一巻とする。各行の幅三・六センチで白罫三十七行を引いて、これに豊肥な気分の行書体をもって一行七、八字の大字で三十二行にわたって書かれ、字面に天皇御璽の内印十三顆を捺しているが、これとは別に本文の奥に貼ってある二顆はもと裏継目にあったものと思われる。当時こういう位記や勅書を書く役は内記の職にいる人であり、ちょうどこのときは小野道風がその職にあった。ここに道風は独特の書風で慎重に、そして濃厚に筆をふるったものと思われる。勅書の文章の作者は民部大輔藤原博文と伝え、『帝王編年記』は筆者を道風の筆と伝えている。

道風の書としては御物の屏風土代（延長六年＝九二八―道風が内裏の屏風に大江朝綱の詩を書いたときの下書）が有名であるが、本書はこれと並び三跡の一人である小野道風の書風を代表するものといわれている⁽²⁰⁾。

セ）『墨 特集：三蹟とその時代』64号、1987（昭和 62）年

寛平三年（八九一）小僧都法眼和尚位で示寂した延暦寺座主第五世円珍が、遷化後三十六年の延長五年（九二七）法印大和尚位に昇せられ、智証大師の諡号を授けられた時の勅書で、分は式部大輔藤原博文。『帝王編年記』延長五年十一月二十七日の条に「智証大師是也。入滅後三十七年。宣命道風書之」とあり、道風（三十四歳）が清書したことが分る。勅書にふさわしい堂々とした力強さ、気品に富み、壮年期の道風の力量をいかんなく発揮している⁽²¹⁾。

ソ）森本菁鳳・館野和己「小野道風」、1988（昭和 63）年。

道風の書風の特徴は、一口でいうと円筆が主となっていることです。文字の懷を広くしていますから、他の人の書より太らかな気分がします。これは道風自身の人間性から自然にそうなったものという気がします。

この書〔智証大師諡号勅書〕は、延暦寺五世の座主円珍が寛平三年（八九一）に七十八歳で没してより、三十六年後の延長五年（九二七）に、朝廷が円珍生前の功績をたたえて法印大和尚位を贈り、智証大師の諡号を授けたときの勅書です。

本紙は、藍染めの麻紙を三枚継ぎにした巻物であり、この書風は屏風土代と比較してもよくわかるように、豊満な行書です。

道風は、文章にも書にも堪能で、しかも、この勅書を命ぜられたときは少内記の任についていて、この年を中心に数々の書活動をおこない、その実績が高く認

められていたのです。

道風三十四歳の執筆になるこの勅書は、線の肉づきがよく、字形が豊かで堂々としており、ゆったりとした安定感のある書です ⁽²²⁾。

タ) 春名好重他編『書道基本用語詞典』、1991(平成3)年。

楷書・行書を適宜ませて、一行に七、八字書いている。字形はよく整っていて、点画はやさしくておだやかであり、筆力を内に潜め、外に表わさない。ゆっくり入念に書いている ⁽²³⁾。

チ) 独立行政法人国立文化財機構他監修『日本の美術 第501号』、2008(平成20)年。

延長五年(927)、示寂後三十六年たった円仁に「智証大師」を諡号する旨などを伝えた勅書。作文は藤原博文が、また清書は小野道風(894-966)が行ったと『扶桑略記』は伝える。和様の書の大成者にふさわしい厳格でありながら落ち着いた書風が好ましい ⁽²⁴⁾。

ツ) 河内利治他編『書道辞典(増補版)』、2010(平成22)年。

延暦寺の座主円珍が示寂して36年後、朝廷より法印大和尚位を賜るとき、智証大師の諡号を授ける宣下の文書。当時能書の聞こえ高い小野道風の筆であることは『帝王編年記』にも記されているが、道風の真跡と確認される「屏風土代」とも同筆と認められる。書風は道風独特のねばり気と重量感とに溢れている ⁽²⁵⁾。

テ) 島谷弘幸『書之美』毎日新聞社、2013(平成25)年。

道風は、「能書の絶妙なり。義之の再生」(『天徳三年八月十六日間詩行事記』)と中国・東晋の能書で書聖と尊重される王羲之の再生とまで評せられる名声を得ていた。当時、並ぶ人のいない能書として一世を風靡していた。『源氏物語』「絵合」においても、道風の筆になる「宇津保物語絵巻」の詞書は「今めかしうをかしげに目も輝くまでみゆ」と現代的で興味深いと高い評価を得ている。

翌延長六年の書写になる「屏風土代」(宮内庁三の丸尚蔵館蔵)が草稿であるのに比して、これは勅書の清書と料紙のためか抑えた筆致であるが、緊張した謹厳な雰囲気を感じられる。本文の冒頭の二行に見られる文字は、実に巧みで豊潤な筆致である。

さらに、個々の字形は王羲之書法を踏襲するが、縦画の直線と横画のうねるような曲線の絶妙なバランス、「秀」「水」などに見られる軽快な連綿の線、「高」に見られる殊更重心を低くするように文字の下半分に太い線を用いるなどは、三筆にない柔和で自在な運筆である。和様の祖と称せられる道風にふさわしい遺墨である ⁽²⁶⁾。

ト) 恵美〔千鶴子〕「改題」、2013(平成25)年。

小野道風(八九四～九六六)は、平安時代中期を代表する「三跡」の筆頭である。小野篁の孫で、若いときから能書として重用され、朱雀・村上天皇の大嘗会において悠紀主基屏風の色紙形を清書するなど活躍した。その書は、『源氏物語』や『栄花物語』で称賛されている。

延暦寺第五世座主であった円珍（八一四～八九一）没後三十六年の、延長五年十二月二十七日に、醍醐天皇（八八五～九三〇）は円珍に対して、法印大和尚位と智証大師の諡号を下賜した。本作は、その際に寺に渡された勅書で、「天皇御璽」の内印が字の上に十三回、別に二回捺されている。『帝王編年記』巻十五（延長五年十一月十一日条）に「宣命道風書之」とあり、少内記であった小野道風（三十四歳）が執筆したものと考えられる。漉き返しと思われる縹色の料紙に、空罫をひき、一行七～八文字という大きめの文字で書かれている。そのたっぷりと豊潤な中にも、勅書という緊張感の伝わる筆致は、王羲之の再生と評価されていた能書である小野道風の力量が存分にうかがわれるものとなっている (27)。

これらの資料の中で、「智証大師諡号勅書」の書としての特徴を表す言葉を以下のように抽出した。なお、たとえば「重量感」と「力強さ」のように、ほぼ同じ意味を表しているのではないかと考えられる言葉もあるが、ここでは別に扱っている。また、カタカナは各資料のはじめに記したものである。

豊潤：	アイウエオカ	ク	サ	テト
妍美：	ア	ウ		
淋漓：	ア	ウ	オ	ク
優麗：		エ	オカ	
温雅：		エ	カ	
端正：		オ		サ
完好：		オ		サ
沈着：		オ		
典雅：		オ		
整齋：		カ		
円味：		カ		
柔らかみ：		カ		テ
やさしい：		カ		タ
おだやか：		カ		タ
豊満：		キ		ソ
調和：		キ		
崇高：		キ		
気力：		キ		
気品：		キクケ		セ
気概：		ク		
気魄：		ケ	シ	
重量感：		ケ	シ	ツ
弾力性：		ケ		ツ

格調：	コ	
豊肥：	ス	
力強さ：	セ	
大らか：	ソ	
肉づき：	ソ	
豊か：	ソ	
堂々：	ソ	
厳格：	チ	
落ち着いた：	チ	
巧み：		テ
バランス：		テ
軽快：		テ
自在：		テ

この中でオ・カ・サの資料はすべて春名好重著であるためひとつにしたとしても、全部で20ある資料中、「豊潤」が8つの資料で用いられている。しかもそのうち、最も古いアは1927（昭和2）年発行、最も新しいトは2013（平成25）年発行である。全体をみると、たとえば、古くは漢字の二字熟語が多かったが、最近ではひらがな・カタカナの言葉が多用されるように、時代ごとの傾向がある。しかし、長く使われている「豊潤」は、この「勅書」を説くのに定番化・定説化しているといえるかもしれない。

ただし、「豊潤」という言葉は一般的に「ゆたかでうるおいがある」を意味し、先の資料の中で積極的な評価を示すべく使用されていると考えられるが、それはなぜだろうか。というのも、「ゆたかでうるおいがある」は、「不足なく余裕がある」とも理解でき、さらにこれは「引きしまっておらずもてあましている」との解釈の可能性もあるからである。つまりこれは、同じ「勅書」をみても、なぜ積極的な評価が採用され、それを示す意味の言葉で説かれるのかという疑問である。

それについては、ケの資料に興味深い記述がみつけれられる。ケには、「それにふさわしく雄大な気魄、大らかな気品の高さ、そして重量感、弾力性など、道風ならではの魅力が溢れております」とあるが、「雄大な気魄」「大らかな気品の高さ」「重量感」「弾力性」は、場合によって、取りようによっては、「意気込みが激しすぎる」「上品ぶっている」「重苦しい」「落ち着きがない」などの解釈の余地がある。しかし、この文章は、最初にある「それ〔和様書道の推進〕にふさわしく」と最後にある「道風ならではの魅力が溢れ」によって、その余地を消している。ここにも先のデノタシオンとコノタシオンの関係がみてとれる。そして、ケのようにテキストとして明確ではないが、他の資料においてもこの関係はありえる。

上記「ふさわしく」と「魅力が溢れ」の読み解き方を指示する、それらに対するコノタシオンに相当するのは何か。それが、既に『入木抄』に示されていた、道風が日

本の書道史上重要な位置を占めていることであり、権威性をもつ「智証大師諡号勅書」を揮毫したことであり、彼が優れた能書であったことを物語る言い伝え・逸話であり、要するに、能筆の中でも別格の三蹟のひとりであることが継承されてきたことであろう。そうであるならば、少なくとも現在なぜ道風が三蹟とされているのか、その判断の根拠は、彼が三蹟であるから、ということに帰着することになる。

したがって、「ふさわしく」や「魅力が溢れ」のような説明がなくとも、三蹟である道風の「智証大師諡号勅書」の解説においては、そこに明確な消極的評価の言葉がない限り、われわれは、「豊潤」であることを高い評価の基準として読み解いてしまうといえるであろう。そして、先の「道風が能書として優れている」は、それだけで意味をもつことになる。

それでは、今回分析対象とした「勅書」のような、コノタシオンとして機能するような要素が少ない、道風の他の書についてはどうであろうか。次回はそれらを検討したい。

(本稿つづく)

註

- (1) 本稿では、伊藤緑苔『入木抄の研究』（中部日本新聞社、1965（昭和40）年）における設定本文を使用している。
- (2) 同前、112 ページ。
- (3) 同前、113 ページ。
- (4) 同前、109 ページ。
- (5) 同前、110 ページ。
- (6) 堀江知彦「智証大師諡号勅書」『MUSEUM：東京国立博物館研究誌(19)』、1952（昭和27）年10月、16～17 ページ。
- (7) ここではバルト（Roland Barthes）の諸論を参考にしているが、それを含めた拙論としては、「教育論としての書論—『入木抄』のロラン・バルト記号学的分析—」（共著者：後藤祐月、『愛知文教大学 教育研究』第5号、2015年）、「言葉による教育の原理および方法に関する研究—『入木抄』を中心とした書論の記号学的分析を通じて—（2）バルトの諸概念と教育論①」（『常葉大学教育学部紀要』第37号、2017年）などがある。
- (8) 藤原茂（鶴来）『和漢書道史』好鷺會、1927（昭和2）年、267～268 ページ。
- (9) 川谷賢『書道史大観』甲子書道会、1928（昭和3）年、66～67 ページ。
- (10) 尾上柴舟・諸橋沂水『書道講座 日本書道史』雄山閣、1932年（昭和7）年、20 ページ。
- (11) 伊東青州「藤原時代書道史」『書之友』第8巻第9号通巻93号（臨時増刊：特輯古筆辞典）東京：雄山閣、1942（昭和17）年7月、185 ページ。
- (12) 春名好重「古筆辞典」『書之友』第8巻第9号通巻93号（臨時増刊：特輯古筆

- 辞典) 東京: 雄山閣、1942 (昭和 17) 年、43 ページ。
- (13) 春名好重編著『日本書道史論』泰東書道院出版部、1943 (昭和十八) 年、97 ページ。
- (14) 田中塊堂「改題」(下中邦彦編)『書道全集 第 12 卷』平凡社、1954 (昭和 29) 年、156 ページ。
- (15) 平山観月『新日本書道史』有朋堂、1965 (昭和 40) 年、103 ページ。
- (16) 町春草『平安書道芸術の人びと』木耳社、1971 (昭和 46) 年、107 ~ 108 ページ。
- (17) 『別冊太陽愛蔵版「書」』平凡社、1979 (昭和 54) 年、148 ~ 151 ページ。
- (18) 春名好重編著『古筆大辞典』淡交社、1979 (昭和 54) 年、787 ページ。
- (19) 文化庁他監修『日本の美術 第 180 号 平安時代の書』至文堂、1981 (昭和 56) 年、6 ページ。
- (20) 文化庁監修『国宝 11 書跡Ⅲ』毎日新聞社、1984 (昭和 59) 年、163 ページ。
- (21) 『墨 特集: 三蹟とその時代』64 号、1987 (昭和 62) 年、8 ページ。
- (22) 森本菁鳳・館野和己「小野道風」『日本書学大系*法書篇 第十一巻』同朋舎、1988 (昭和 63) 年、74 ~ 75 ページ。
- (23) 春名好重他編『書道基本用語詞典』中教出版、1991 (平成 3) 年、619 ページ。
- (24) 独立行政法人国立文化財機構他監修『日本の美術 第 501 号』至文堂、2008 (平成 20) 年、1 ページ。
- (25) 河内利治他編『書道辞典 (増補版)』二玄社、2010 (平成 22) 年、176 ページ。
- (26) 島谷弘幸『書之美』毎日新聞社、2013 (平成 25) 年、73 ページ。
- (27) 恵美〔千鶴子〕「改題」東京国立博物館ほか編『和様の書』読売新聞社ほか、2013 (平成 25) 年、265 ~ 266 ページ。

- ・引用文中の〔 〕カッコ内は古市による。
- ・基本的に旧字体は新字体で表記している。
- ・資料に筆者名がないものは不詳である。
- ・本稿中、アンダーラインは古市による。